

# 主体変化を表す他動詞文の分析

川野 靖子

キーワード：再帰構文、道具主語構文、位置変化、状態変化、アスペクト

## 要 旨

従来のアスペクト研究では、再帰構文は主体動作とともに主体変化をも表すということが指摘されている。しかしその場合の「主体変化」の具体的内容や再帰構文が「主体変化」を表すようになる仕組みは明らかにされていない。

いわゆる[道具]を主語とする他動詞文の中にも、再帰構文と同様、主体変化を表すとみられるものがある。本稿ではこうした道具主語構文と再帰構文について、以下の点を指摘する。

- (a) 「太郎が顔に墨を付ける」のような位置変化動詞を用いたタイプの再帰構文の表す「主体変化」の具体的内容は、「主体が客体を包含した状態になる」というものである。
- (b) 道具主語構文の表す「主体変化」とは、具体的には「主体の位置変化」を指す。
- (c) 再帰構文における「主体変化」は文レベルで生じる派生的な含意である。一方道具主語構文における「主体変化」は動詞レベルの含意である。
- (d) 再帰構文がテイル形で進行と結果継続をそれぞれ表し得るのに対し、道具主語構文では結果継続の解釈のみが可能である。両者のこうしたふるまいの違いは、上記(c)から説明される。

## 1. 研究の目的

「花子が髪を染める」「太郎が服を着る」のような再帰構文は、テイル形で「進行」の解釈だけでなく「結果継続」の解釈をも実現する。

- (1) 花子が髪を染めている (進行／結果継続)
- (2) 太郎が服を着ている (進行／結果継続)

(3) 花子が顔に墨を付けている (進行／結果継続)

これについて先行研究では、再帰構文は主体動作を表すとともに主体変化をも表すという指摘がなされている。しかし再帰構文がどのような仕組みで「主体変化」を表すようになるのかという点に関しては、明示的な説明がなされているとは言い難い。

再帰構文以外にも、主体変化を表すとみられる他動詞文がある。「水がグラスを満たす」、「石が穴をふさぐ」などの、いわゆる[道具]として解釈できる名詞句を主語とする他動詞文(本稿ではこれを「道具主語構文」と呼ぶ)の一部がこれに当たる。これらは、テイル形で結果継続を表す。

(4) 水がグラスを満たしている (結果継続)

(5) 石が穴をふさいでいる (結果継続)

(6) 白い布がテーブルを覆っている (結果継続)

本稿では主体変化を表す他動詞文として再帰構文と道具主語構文をとり上げ<sup>\*1</sup>、これらの動詞文の表す「主体変化」とは具体的にどのような内容の変化であるのか、またこれらの動詞文が「主体変化」を表すようになる仕組みはどのようなものかを明らかにする。なお再帰構文と道具主語構文には、再帰構文がテイル形で進行と結果継続を両方表すのに対し、道具主語構文は進行を表しにくいという違いもみられる。本稿では両者の間にこのような違いが生じる理由についても併せて論じる。

---

\*1 仁田(1982b)、高橋(1985)、村木(1986)、工藤(1991)等は、再帰構文の表す運動は「動作主以外に波及しない動作」、「はたらきかけ性のない内部運動」であると述べ、再帰構文を自動詞文相当、あるいは自動詞文に近い動詞文であるとしている。しかし本稿では、はたらきかけの帰着点が主体自身であるか主体以外であるかという違いはあるものの、再帰構文も主体(ガ格句)から客体(ヲ格句)へのはたらきかけ(主体が客体の変化をひきおこす)を表すという点では通常他動詞文と同じであると考え、再帰構文を他動詞文の一つとして位置づける。なお天野(1987a)は、仁田(1982b)等が再帰構文が自動詞文に近いふるまいをするとして挙げた現象(直接受動文が成立しない／同じ意味を表す自動詞が存在する／対応する自動詞がなく、対応する使役-他動性他動詞が存在する)を検証した上で、再帰構文が自動詞文に近づいているとは言えないとする結論を提示している。

## 2. 再帰構文

### 2.1. 先行研究の概要と残されている問題

本稿で取り上げるのは、再帰構文の中でも主体動作・客体変化動詞を用いた再帰構文である<sup>\*2</sup>。主体動作・客体変化動詞を用いた再帰構文は、A)ヲ格句で示される客体が主体の部分である場合と、B)客体位置変化の着点(ニ格句)または起点(カラ格句)が主体の部分である場合とに分けられる。

#### A) 客体=主体の部分

- (7) 生徒が髪を染める
- (8) 太郎が腕を折る

#### B) 客体位置変化の着点または起点=主体の部分

- (9) 花子が顔に墨を付ける
- (10) 太郎が頭に帽子をかぶる
- (11) 太郎が(顔から)眼鏡をはずす

主体動作・客体変化動詞はふつうテイル形で進行を表すが<sup>\*3</sup>、上記のような再帰構文は結果継続の解釈をも実現する。

- (12) 生徒が髪を染めている (進行/結果継続)
- (13) 花子が顔に墨を付けている (進行/結果継続)
- (14) 太郎が眼鏡をはずしている (進行/結果継続)

これについて先行研究では、再帰構文は主体動作だけでなく主体変化をも表すという指摘がなされている。再帰構文が主体変化を表すようになる仕組みについて高橋(1975)は「自分の所属物に対する働きかけは、他に影響を及ぼすよりも自分の状態を変化させることの方に多く働く」と述べている。また仁田(1982b)は、「主体から

\*2 再帰構文の中でも「太郎が手をたたく」のような客体変化を表さない動詞を用いた再帰構文は主体変化を表さないということが、すでに工藤(1982)等の先行研究で指摘されている。

\*3 例) 太郎が子供の髪を染めている (進行/\*結果継続)  
花子が壁にペンキを付けている (進行/\*結果継続)

発せられた状態変化を引き起こす運動が主体自身に戻ってくることによって、結局主体自身の状態変化を招くことになる」としている。

こうした高橋(1975)や仁田(1982b)の議論は、A のタイプの再帰構文の説明としては妥当であろう。たとえば「生徒が髪を染める」という再帰構文に対しては、「染める」という動詞の表す動作によって「髪」が状態変化を被り、結果的に「髪」の所有者である「生徒」自身が状態変化を被ったことになる、といった説明が可能である。しかしこの議論を B のタイプの再帰構文に適用するのは問題がある。B のタイプの「付ける」、「かぶる」、「はずす」といった動詞は客体位置変化動詞であるから、この場合の「所属物に対する働きかけ(高橋(1975))」、あるいは「主体から発せられた状態変化を引き起こす運動(仁田(1982b))」とは、客体の位置変化を引き起こすことを指す。それなのになぜ、その働きかけや運動が戻ってくることで今度は主体の状態変化が引き起こされることになるのか。高橋(1975)や仁田(1982b)の議論では、「付ける」や「かぶる」、「はずす」等の動詞が表す「位置変化を引き起こす」という運動と、主体に引き起こされる状態変化との関係が明らかでないのである。

先行研究の中では、工藤(1982)、(1991)が B のタイプの再帰構文に関して詳しく述べている。工藤(1982)、(1991)は、「花子が顔に墨を付ける」のような再帰構文は「客体を主体にとりつけることによる主体の変化」を表すとし、次のような分析を提示する。

- (15) 花子が                      顔に                      墨を                      付ける  
間接的变化主                      直接的变化主

工藤によれば、(15)において「顔」は「付ける」という動作によって直接的に変化を被る「直接的变化主」である。そして主語の「花子」は「顔」の所有者であるため、「花子」自身も間接的に変化を被ることになるとされる。

しかしここで問題になるのが、(15)の「顔」は果たして「変化主」と言えるのかという点である。「付ける」は客体、すなわち(15)でいう「墨」の位置変化を表す動詞であり、「顔」は「墨」の位置変化先(着点)であるにすぎない。(15)における

「直接的变化主」は「墨」なのであって、「顔」ではないはずである<sup>4</sup>。

以上のように、先行研究では再帰構文は主体動作だけでなく主体変化をも表すという指摘はなされているが、次の点に関しての考察がなされていないと言える。

- (16)・位置変化動詞である「付ける」、「かぶる」、「はずす」等の動詞を用いた再帰構文(B)が「状態変化」を表すようになる仕組みはどのようなものか。  
 ・その場合の「状態変化」とは、具体的にどのような内容の変化を指すのか。

以下では、再帰構文は主体変化を表すという議論を前提とした上で B のタイプの再帰構文について上記二点の考察を行う。

## 2.2. 再帰構文における「主体変化」

位置変化動詞である「付ける」、「かぶる」等の動詞は、通常他動詞文(再帰的でない他動詞文)においては客体の位置変化を表すだけで、客体のとり付け先の変化までは表さない。

- (17) 花子が 壁に 墨を 付ける  
           非変化      位置変化

しかし同じ動詞を用いた次のような再帰構文は、客体のとり付け先である主体の状態変化をも表す。

\*4 いわゆる「壁塗り代換」をおこす動詞のように、「物」の位置変化と、その着点である「場所」の状態変化の両方を表すと考えられる動詞もある。ただしその場合も、場所の状態変化は「主体が場所ヲ物デ〜」という、位置変化構文(「主体が場所ニ物ヲ〜」)とは別の構文で表される(奥津(1981)、川野(1997)等参照)。

- { 太郎がグラスに水を満たす      (「水」の位置変化)  
 { 太郎がグラスを水で満たす      (「グラス」の状態変化)  
 { 太郎が部屋に紙くずをちらかす      (「紙くず」の位置変化)  
 { 太郎が部屋を紙くずでちらかす      (「部屋」の状態変化)

「付ける」は物の位置変化のみを表す動詞であり、代換をおこさない。

- { 太郎が壁にペンキを付ける      (「ペンキ」の位置変化)  
 { \*太郎が壁をペンキで付ける      (\*「壁」の状態変化)

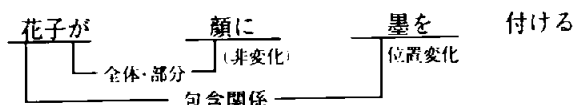
- (18) 花子が 顔に 墨を 付ける  
 状態変化                      位置変化

つまり同じく客体のとり付け先でありながら、(17)の「壁」は変化を生じず(18)の「花子」は状態変化を生じることになるのである。それでは(17)の「壁」と(18)の「花子」とでは何が異なるのであろうか。

相違点として考えられるのは、(18)における厳密な意味での「とり付け先」((17)の「壁」に対応する意味での「とり付け先」)は「顔」であって、「花子」は「とり付け先の所有者」であるということである。このように考えると、(17)における「壁」と「墨」の関係と、(18)における「花子」と「墨」の関係には違いがあることに気づく。(17)では「墨」と「壁」は単に「存在物」と「存在場所」の関係にあるだけであるが、(18)の「花子」と「墨」は「花子の部分(顔)に墨が存在する」という関係になるわけであるから、そこには包含関係が成立することになると考えられる。このことから本稿は、「主体(花子)が客体(墨)を包含した状態になる」ということが、再帰構文(B)における「主体の状態変化」の具体的な内容に当たると考える<sup>\*5</sup>。これを図に示すと次のようになる。

(19) 再帰構文(B)における主体の状態変化

=主体が客体を包含した状態になること



なお、以上は位置変化の着点为主体の部分である場合の議論であるが、位置変化の起点が主体の部分である場合にも同様の議論が当てはまる。すなわち「太郎が(顔から)眼鏡をはずす」などの再帰構文は、「主体が客体を包含していた状態(太郎の

\*5 客体の位置変化先が主体の部分であっても、「花子が頭に水をかける」、「太郎が水を浴びる」のような再帰構文はテイル形で結果継続の解釈を実現しない(花子が頭に水をかけている(進行/\*結果継続)、太郎が水を浴びている(進行/\*結果継続))。これらの動詞文においては、客体は着点(主体の部分)に到達してもその場にとどまって存在し続けるわけではない。そのため主体と客体の間に包含関係が成立せず、結果継続の解釈が生じないのだと考えられる。

部分(顔)に眼鏡が存在する状態)から客体を包含しない状態になる」という内容の変化を表すと言える\*6。

工藤(1991)等の従来の研究と本稿の分析の大きな違いは、本稿では再帰構文「花子が顔に墨を付ける」や「太郎が眼鏡をはずす」の表す「状態変化」を「付ける」や「はずす」という動詞それ自体の本来的な含意とは考えず、文のレベルの派生的な含意として考えるという点である。工藤(1991)は再帰構文「花子が顔に墨を付ける」における二格句「顔」を状態変化主とするが、この議論を押し進めると再帰構文でない通常他動詞文、たとえば「花子が壁に墨を付ける」のような動詞文においても二格句(「壁」)を状態変化主とみなさなければならなくなる。二格句の示す「場所」と位置変化物である客体(ヲ格句)の関係は再帰構文であろうと通常他動詞文であろうと変わりがなからである。したがって工藤(1991)の分析は、「付ける」は位置変化(ヲ格句)と状態変化(二格句)の両方を表す動詞であるという議論を前提にしていることになるが、前にも述べたように「付ける」は位置変化専用の動詞であり、動詞自体の語彙的意味として状態変化をも表すとは考えにくい。本稿では再帰構文(B)における「主体の状態変化」を「主体が客体を包含した状態になること(あるいは、包含した状態から包含しない状態になること)」と規定したが、このような内容の変化は「①主体」と「②主体の部分」、それに「③主体の部分に位置変化する客体(あるいは、主体の部分から位置変化する客体)」の三者が揃った場合にはじめて成立するものである。つまり本稿のいう「主体の状態変化」は、「付ける」や「はずす」等の動詞自体がもつ「客体位置変化」という語彙情報に、「着点(あるいは起点)が主体の部分である」という再帰構文特有の文レベルの情報が加わることで生じる二次的な含意として位置づけられることになる。

以上、本節では位置変化動詞を用いた再帰構文(B)が状態変化を表すようになる仕組みを明らかにした。

\*6 客体位置変化の起点が主体の部分であるタイプの再帰構文には、テイル形で結果継続の解釈が出やすい場合と出にくい場合があるようである。

例) 太郎が眼鏡をはずしている	(進行/結果継続)
太郎が上着を脱いでいる	(進行/結果継続)
花子が(顔から)シールをはがしている	(進行/?*結果継続)
花子が(髪から)ほこりをとっている	(進行/?*結果継続)

このタイプの再帰構文の場合、客体位置変化が起こる以前に主体と客体が接していたことが想定しやすいほど(たとえば「太郎」と「眼鏡」、「太郎」と「上着」)、テイル形で結果継続の解釈が出やすくなるようである。

### 3. 道具主語構文

他動詞文の中には、いわゆる[道具]として解釈できる名詞句を主語にとる動詞文が存在する。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| (20) 水がグラスを満たす    | cf. 太郎がグラスを水で満たす    |
| (21) 雪が山頂を覆う      | cf. 太郎がテーブルを布で覆う    |
| (22) きれいな花が食卓を飾る  | cf. 太郎が食卓を花で飾る      |
| (23) 石が壁の穴をふさぐ    | cf. 太郎が壁の穴を石でふさぐ    |
| (24) 小石が隙間を埋める    | cf. 太郎が隙間を小石で埋める    |
| (25) 岩が川の流れをせき止める | cf. 太郎が川の流れを岩でせき止める |

「満たす」、「覆う」、「飾る」などの動詞は、上記参照例のような[動作主]を主語とする動詞文ではテイル形で進行を表し、結果継続は表さない\*7。しかし[道具]を主語とする場合(以下、これを「道具主語構文」と呼ぶ)には結果継続の解釈を実現する\*8。

- |                     |             |
|---------------------|-------------|
| (26) 水がグラスを満たしている   | (?*進行/結果継続) |
| (27) 雪が山頂を覆っている     | (?*進行/結果継続) |
| (28) きれいな花が食卓を飾っている | (*進行/結果継続)  |
| (29) 石が壁の穴をふさいでいる   | (*進行/結果継続)  |
| (30) 小石が隙間を埋めている    | (*進行/結果継続)  |
| (31) 岩が川の流れをせき止めている | (*進行/結果継続)  |

このことから上記のような道具主語構文は主体変化を表すと考えることができる。

それでは道具主語構文が主体変化を表す仕組みはどのようなものなのか。「満たす」、「覆う」、「飾る」などの動詞は主体が客体の状態変化を引き起こすことを表す

\*7 例) 太郎がグラスを水で満たしている (進行/\*結果継続)

太郎がテーブルを布で覆っている (進行/\*結果継続)

\*8 主語が有生物である場合にも同様の結果が得られることに注意されたい。

例) 学生が教室の入り口をふさいでいる (\*?進行/結果継続)

観客が会場を埋めている (\*?進行/結果継続)



動詞である。そして(20)～(25)における主体がどのようにして客体の状態変化を引き起こすのかを考えてみると、そこには主体の位置変化(主体がそこに存在する状態になること)が関わっていることに気づく。たとえば(20)の「水がグラスを満たす」では、主体の「水」が「グラス」に存在するようになることで、「グラス」の状態変化(水で満ちた状態になる)が引き起こされることになる。同様に(22)では、「花」が「食卓」に存在するようになることで「食卓」の状態変化(美しい状態になる)が引き起こされる。つまり(20)～(25)のような道具主語構文は、主体の「位置変化」とそれによる客体の「状態変化」を表す動詞文であると言える。したがって道具主語構文における主体の「変化」の具体的内容は、「位置変化」であるということになる<sup>9)</sup>。

ところで次の例からもわかるように、すべての道具主語構文がテイル形で結果継続の解釈を実現するというわけではない。

(32) 高温の熱が金属を溶かしている (\*結果継続)

(33) 風が洗濯物を乾かしている (\*結果継続)

これらの道具主語構文と(20)～(25)のような道具主語構文とでは、それぞれが表す「客体状態変化」の内容に違いがみられる。(20)～(25)が「グラスが空の状態から水で満ちた状態になる」、「山頂がむき出しの状態から雪で覆われた状態になる」といった、主体(「水」、「雪」)が客体に位置変化することで生じる客体(「グラス」、「山頂」)の変化を表すのに対し、(32)や(33)は「金属が固まった状態から溶けた状態になる」、「洗濯物が湿った状態から乾いた状態になる」といった客体(「金属」、

<sup>9)</sup> 次のように、主体の具体的な運動(ある場所からその場所への位置変化)を想定するのが現実的には難しく、主体は元々そこに存在していたと解釈するのが自然な例もある。

- |                  |            |
|------------------|------------|
| 例) ふすまが部屋を仕切っている | (*進行/結果継続) |
| 櫓が庭を隔てている        | (*進行/結果継続) |
| カーテンが光を遮っている     | (*進行/結果継続) |
| 桜の木が建物を囲んでいる     | (*進行/結果継続) |
| 垣根が風を防いでいる       | (*進行/結果継続) |
| 高い建物が花子の家を挟んでいる  | (*進行/結果継続) |

しかしこれらの場合も「主体がそこに存在する」ということが客体の状態変化を引き起こしているという点では(20)～(25)の場合と同じであるので、本稿で扱っている主体変化を表す道具主語構文の類例と考えられる。

「洗濯物」)そのものの内部的な変化を表す。こうした客体の内部的な変化は、「主体による客体への位置変化」によって引き起こされるわけではない。(32)、(33)における主体は客体変化の引き起こし手であるという点では(20)～(25)の場合と同じであるが、主体自身が客体に位置変化することで客体の状態変化を引き起こしているのではない。客体変化を引き起こす運動の内容が「主体変化」ではないため、これらの動詞文はテイル形で結果継続の解釈を実現し得ないのである。このように、道具主語構文がテイル形で結果継続の解釈を実現するのは、これらの動詞文が主体の位置変化によって引き起こされる客体の状態変化を表す場合であると言える。

なお、以上の議論は次のような生産を表す他動詞文の場合にも当てはまる。

(34) 人々が店の前に行列を作っている (??進行／結果継続)

(35) 鳥が群をなしている (\*進行／結果継続)

(34)、(35)は結果継続の解釈を実現するが、これらはいずれも主体の位置変化による客体の生産を表す。たとえば(34)では主体である「人々」がそこに存在するようになることで「行列」という生産物が生み出されることになる。(34)、(35)における主体と客体の関係は[材料]と[生産物]であるが、主体の位置変化によって引き起こされる客体変化を表すという点では先の(20)～(25)のような道具主語構文の場合と同様である。

#### 4. 再帰構文、道具主語構文とテイル形の解釈

再帰構文と道具主語構文には、テイル形の解釈に関して次のような違いがみられる。

再帰構文

(36) 花子が髪を染めている (進行／結果継続)

(37) 花子が顔に墨を付けている (進行／結果継続)

道具主語構文

(38) 水がグラスを満たしている (\*?進行／結果継続)

(39) 学生が教室の入り口をふさいでいる (\*?進行／結果継続)

(36)はヲ格句で示された客体が主体の部分である A のタイプの再帰構文、(37)は客

体位置変化の着点が主体の部分である B のタイプの再帰構文である。これらの再帰構文がテイル形で進行と結果継続の両方を表し得るのに対し、(38)、(39)のような道具主語構文のテイル形は進行の解釈を表しにくい。本節では再帰構文と道具主語構文にこのような違いが生じる理由について論じる。

まず、道具主語構文がテイル形で必ず結果継続を表すことになる理由を考える。道具主語構文は「主体が客体の状態変化を引き起こす」ということを表すが、前節でも述べたように、この場合の「客体変化を引き起こす主体の運動」とは、具体的には「主体が位置変化する」ということを指す。つまり道具主語構文は「主体の位置変化」とそれによる「客体の状態変化」を表すだけで「主体の動作」は表さない動詞文であると言える。道具主語構文がテイル形で進行の解釈ではなく結果継続の解釈を実現するのはこのためである<sup>\*10</sup>。なお、主体動作を表す用法は「太郎がグラスを水で満たす」のような[動作主]を主語とし[道具]をデ格句にとる動詞文が担うと考えられる。

一方、主体変化が客体変化成立の前提となる道具主語構文とは異なり、再帰構文は、主体の変化が客体の変化を引き起こすという仕組みにはなっていない。再帰構文における客体変化は主体動作によって成立するのである。たとえば「花子が顔に墨を付ける」では、主体「花子」は客体「墨」の変化(位置変化)を引き起こすために、「墨を手にとって顔になすりつける」といった内容の運動を行う。また「花子が髪を染める」では、「花子」は「髪」の変化(状態変化)を引き起こすために、「染料を髪に塗る」などの運動を行う。主体によるこれらの運動はいずれも「動作」に当たるものであり、「変化」ではない<sup>\*11</sup>。再帰構文の表すこのような「主体動作」は、「太郎が壁に墨を付ける」、「花子が人形の髪を染める」のような再帰構文でない通常の他動詞文の表す「主体動作」と内容的に全く同じものである。

\*10 「水がグラスを満たす」のような道具主語構文がテイル形で進行の解釈を全く生じないということではない。たとえば「水が徐々にグラスを満たしている」のように、「徐々に」や「ゆっくり」といった副詞を挿入すれば進行の解釈もある程度出やすくなる。本稿は、このような解釈は変化(主体変化)の結果に至るまでの過程がとり上げられることで生じる解釈であると考えている。こうした現象は、主体変化を表す他動詞文だけでなく、主体変化自動詞文にもみられるものである。

例) ドアがゆっくり閉まっている (進行)

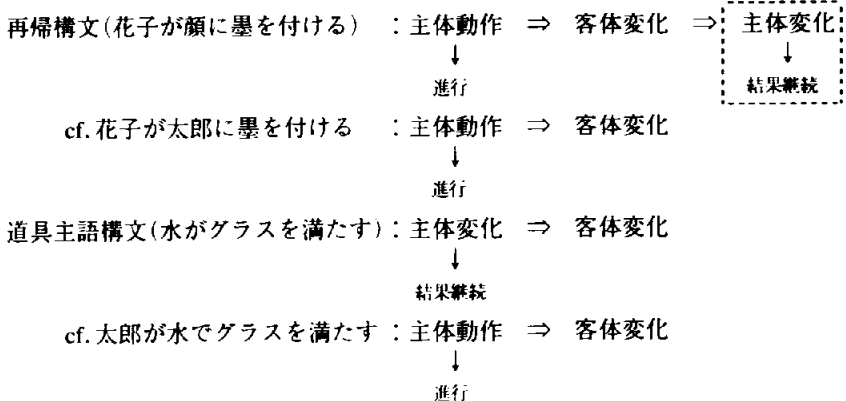
\*11 「花子が髪を染める」には、花子自身の手で髪を染める場合と他人に染めてもらう場合(たとえば美容院で染めるなど)が考えられるが、どちらも「髪」の変化を引き起こすのは「動作」であって「変化」ではないという点は同じである。

それでは再帰構文においてはいつ主体変化が成立するのかといえば、それは客体の変化が成立した後である。たとえば「花子が顔に墨を付ける」では、はじめに「墨」の位置変化が成立し、次に「花子」の状態変化(「墨」を包含した状態になる)が成立する。また「花子が髪を染める」でも、まず「髪」が状態変化し、それが「花子」自身の状態変化につながる。このように再帰構文は、客体変化を引き起こすための「主体動作」と、客体変化の成立後に主体が被ることになる「主体変化」の両方を表す。テイル形で進行と結果継続の解釈をそれぞれ実現するのはこのためである。

再帰構文と道具主語構文は主体変化を表す他動詞文であるという点で共通性をもつ。しかしそうした「主体変化」の含意を生じるレベルはそれぞれ異なっている。客体変化他動詞は主体による客体への働きかけとそれによる客体の変化を表すが、再帰構文における「主体変化(状態変化)」はこうした動詞の語彙の意味の中には含まれていない。これらは文レベルで生じる二次的な含意である。再帰構文は動詞レベルで「主体動作」を、文レベルで「主体変化」を表し、テイル形で進行の解釈と結果継続の解釈をそれぞれ実現する。一方道具主語構文の表す「主体変化(位置変化)」は、客体変化を引き起こす主体の運動としての「変化」であり、動詞レベルの含意として位置づけられるものである。道具主語構文は動詞レベルで「主体変化」を表し、テイル形で結果継続の解釈を実現する。

以上、本節で述べたことをまとめると次のようになる。

(40)<sup>\*12</sup>



\*12 点線は文レベルの含意であることを示す。

## 5. まとめ

本稿では主体変化を表す他動詞文として再帰構文と道具主語構文をとり上げ、それぞれにおける「主体変化」の具体的内容を規定し、これらの他動詞文が「主体変化」を表すようになる仕組みを明らかにした。また再帰構文と道具主語構文がテイル形の解釈に関して異なるふるまいをみせることを指摘し、その理由を明らかにした。

## 参考文献

- 天野みどり(1987a)「日本語文における<再帰性>について——構文論的概念としての有効性の再検討——」『日本語と日本文学』7 筑波大学国語国文学会
- 天野みどり(1987b)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151
- 稲村すみ代(1994)「再帰構文について」『日本語学科年報』16 東京外国語大学
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53、54
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文——いわゆる spray paint hypallage について——」『国語学』127
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点——いわゆる「壁塗り代換」を中心に——」『筑波日本語研究』2 筑波大学芸文・言語研究科日本語学研究室
- 金水敏(1994)「連体修飾の「〜タ」について」『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4 武蔵大学人文学会
- 工藤真由美(1991)「アスペクトとヴォイス」科学研究費報告書『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』横浜国立大学
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 佐藤琢三(1994)「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』1 筑波大学芸文・言語研究科応用言語学コース
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103
- 高橋太郎(1985)「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4
- 竹沢幸一(1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と、「ている」の解釈」『日本

語のヴォイスと他動性』くろしお出版

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

仁田義雄(1982a)「動詞の意味と構文——テンス・アスペクトをめぐって——」『日本語学』1

仁田義雄(1982b)「再帰動詞、再帰用法—— Lexico-Syntax の姿勢から——」『日本語教育』47

仁田義雄(1989)「拡大語彙論的統語論」久野暲、柴谷方良(編)『日本語学の新展開』くろしお出版

細川由起子(1990)「日本語のいわゆる再帰動詞とその直接受動構文について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂

堀内仁(1998)「『存在-所有』交替とテイル文の読みとの相関について」第12回日本語文法談話会ハンドアウト

堀川智也(1993)「二格名詞の結果を表す「結果の副詞」について」『日本語教育』80

村木新次郎(1986)「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』51-1

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

森田良行(1982)「動詞「囲む」の提起する意味論上の問題——意味規定の条件の移行について——」『木村宗男先生記念論文集』早稲田大学語学教育研究所

森田良行(1994)「動詞状態相の諸問題」『近代語研究』9 武蔵野書院

森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

山梨正明(1987)「深層格の核と周辺——日本語の格助詞からの一考察——」『言語学の視界』大学書林

(2000年6月22日 受理)